

## 鏑木清方の文化勲章への軌跡

### —新たに寄贈された作品や資料から見る—

宮崎 徹

#### はじめに

鎌倉市鏑木清方記念美術館は、清方の画業と制作の場を後世に伝えて欲しいと、平成6年にご遺族から作品と資料、終の棲家の土地と建物の寄贈を受け、平成10年に開館した。その収蔵品は清方初期の主な作品と、後期の優れた作品で構成されており、清方の画業を語る上では欠かせないコレクションである。そこへ、平成20年、清方中期の力作である七絃会出品の《桜もみち》などが個人の方から寄贈され、よりバランスのとれたものになった。

この度、さらに鏑木清方のご遺族から追加資料の寄贈もあった。その主だったものは、昭和29年に清方が授章した文化勲章とその証書である。これら寄贈により、唯一の記念美術館としての重要性がさらに増した。

**主な受贈品** 文化勲章とその証書の他に、当時の皇太子、今上天皇からご成婚の時に賜った盃がある。盃そのものには記銘はないが、清方自筆の箱書きに「雲鶴盃」、箱蓋の裏には「昭和三十四年皇太子殿下御成婚御披露記念」と認められており、大切に保管されていた。作品としては肉筆回覧誌と《金沢絵日記》<sup>1</sup>があり、その他の資料には大正期の制作記録、烏合会の招待券、模写などがある。多くは、平成10年に刊行された『鏑木清方画集』<sup>2</sup>に図版が掲載されている。

本稿では、これらの寄贈された作品・資料を紹介しながら文化勲章の受章に至るまでをたどりたい。

#### 一 挿絵画家になるまで

**小学校時代** 鏑木清方は、明治11年、東京神田佐久間町に生まれた。その後、16年に京橋鉄砲洲にある私立鈴木小学校に入学し、22年、卒業を前に中退して神田錦町にある私立東京英語学校へ入学している<sup>3</sup>。今回の寄贈資料の中に当時学校が発行した証書がいくつか含まれている。整理すると、資料1のようになる。いずれも鈴木小学校のもので優れた成績であり、授業を抜け出して役者の真似事をしていたとは想像しがたい。賞状の保存状態は良好で、とても大切に保管されていたことが窺われる。

その内容は、明治17年10月22日に鈴木小学校で小学初等科四級卒業、18年11月7日に初等科二級卒業、19年11月12日に中等六級の試験で甲状受け、翌日尋常科第四年級に編入。21年には品行中等を証されている。この時清方は満9歳10ヶ月である。(詳細は資料1)

**挿絵画家をめざす** 13歳の時、父・條野採菊や三遊亭圓朝の勧めで挿絵画家になるため水野年方入門した。当時既に歴史画に転じていた年方からは、まず挿絵の描き方を学んだ。26年頃には同門の大野静方の紹介で書画研究会に入り、年方以外の筆法も積極的に学んだと言う。そこには、四條派や住吉派を学び武内桂舟についていた山中古洞や、國周に学び後に尾形月耕についた福永耕美(福永公美)、大和絵を在原古玩に学んでいた高田鶴僊、四條派に学んだ都筑眞琴らが所属していた<sup>4</sup>。年方からは挿絵の描き方を主に学んでいたため、各派の描法や、伝統的な技法を身に着けるよい機会になった。また、生活面でも影響を受けたという。「派手な下町の暮らしに見られないひきしまつた生活に觸れるのが、どんなに薬になつたか知れない<sup>5</sup>」とその実直な暮らしぶりに惹かれていた。

**新聞の挿絵** 清方は、明治26年、15歳で初めてコマ絵が『やまと新聞』に掲載されるに当たって、雅号「清方」を年方より拝受した。ただ、『やまと新聞』は父が経営しており、清方としては30年1月から掲載が始まった『東北新聞』の仕事任せられてやっと独り立ちした気持になったという。その後、新聞挿絵では『讀賣新聞』や『報知新聞』、『東京日日新聞』など、毎

年東京と地方紙で三紙程度の連載を担当していた。

27年に描いた《小楠公弁内侍を救う》は、現在に伝わる清方作品の最も古いものとされているが、画題は年方が重きを置いていた歴史画であり、清方が年方から学んでいた内容が伝わる。

**肉筆回覧誌** 肉筆回覧誌の一部が今回寄贈されている。『美術くら遍 一』(28年)、『研究画林 卷之壺』(29年)等である。

二十八年の『美術くら遍 一』の最終頁には採点表がある。そこには「第一絵合會得点表」とあり、「絵合會」という表記を一つの集まりの名前と考えることができる。参加者は清方の他、大石雅方と山本宣方で、年方社中によるものであろう<sup>6</sup>。清方の描いた絵の得点は二十点満点中十六点と十五点で、山本宣方の十三点がこれに続く。清方の作品ははかなり細かいところも綿密に描けている。

翌年の『美術くら遍 満起乃三』は、清方が最高の十五点(二十点満点)を二枚描いており、それに池田輝方、本間春方<sup>7</sup>が続く。これも三人での回覧誌であったが、同年の『研究画林 卷之壺』には多数の参加が見られる。清方の他に、英昌、雪華、玉蘭、池田正<sup>8</sup>、英貞、光方<sup>9</sup>、竹翠、雪窓、英昭<sup>10</sup>、西村峻、雪耕、英房、本留、和鷹、如雪、英光<sup>11</sup>、雅方<sup>12</sup>、萩村、晩雪、宣方、晩翠、應當<sup>13</sup>等の名がある。これは、年方と右田年英門下で描いているようだ。清方の例えば《道成寺》(図1)は、白拍子が女人禁制の立札の前で、桜の花をあしらった赤い衣装を着て踊る姿が描かれており<sup>14</sup>、評点ではなく、最終頁の批評には、「道成寺 掬すべしとす惜む可きハ衣服のヒダを抹殺せしこと」<sup>15</sup>と書かれている。



図 1

**紫紅会** 30年、書画研究会のうち絵画を志す者のみによって紫紅会が結成され、清方はこの仲間内の展覧会に《寒月》を出品している。肉筆回覧誌は『紫紅』と改められた。清方所蔵の『紫紅』(31年)には、《京洛の花》《枕慈童》《博多小女郎波枕》《稲妻表紙<sup>16</sup>》が描かれているが、ここには採点表も批評もない<sup>17</sup>。

参加者は清方の他、都筑真琴、福永耕美、田中桃園<sup>18</sup>、竹田敬方<sup>19</sup>、村上玉宝、塚原湖東、山中古洞であった。ここにきて、清方が述懐していた「他流試合」という形が見られる。《寒月》を出品した展覧会を再現しようはないが、ここには当時の描かれた作品がそのままの順に綴られており、まるで展覧会場で作品を順路に従って鑑賞するのに似ている。そこに描かれた《京洛の花》は他の作品に比べて色彩豊かである。

紫紅会はこの頃発足した、小堀鞆音門下の安田鞆彦、磯田長秋らの作品互評の研究会が紫紅会と称していたこと、今村紫紅とも名前が重複するのなどもあり、34年1月に新たに烏合会を結成する。また、安田鞆彦の属する紫紅会も、今村紫紅が加わったことを受けて、同月紅児会と改名している<sup>20</sup>。

## 二 日本画家をめざして

**烏合会の招待券** 烏合会は、文字どおり様々な流派の会員からなる青年美術団体であった。清方はこれに参加し、同志から各々の技術を学ぶことによって、その画力を高めることができた。清方の初期代表作の一つである《一葉女史の墓》(35年)もこの会への出品作である。烏合会は例会の他、毎年春と秋に展覧会を催して研究発表の場とし、37、38年頃に最盛期を向かえていたが、文展が開催されるとともに発表の場としての魅力は薄れていった。文展出品に力を注ぐ者が大半を占め、烏合会展は各会員の弟子の発表の場を兼ねるように変わり、当初の目的は達成され45年の第23回をもって展覧会の開催を止めた。

この度の寄贈資料の中に、烏合会の招待券が含まれている(図2、資料2)。その券面の一つを取り上げると、「烏合會 觀覽券 第十四回繪畫展覽會 十月十九 二十 二十一 二十二 四日間 御同伴 御随意 日本橋 萬町 常盤木俱樂部

部」とある。サイズは 7.3 cm × 5.7 cm の小さなもので、少し硬めの紙に木版で刷られている。これまでに書誌によって各回の日付や会場、内容を確認してきたが<sup>21</sup>、この招待券によってそれらが裏付けされた。また「御同伴御随意」とあり、より多くの方に観てもらいたい趣旨が伝わる。

招待券には紅児会のものもあった。明治 39 年第 7 回と 40 年の第 8 回のものである。紅児会も鳥合会と同じ日本橋常盤木倶楽部を会場としていた。会期が異なり会場で会うというよりは交流があって招待券のやり取りがあったと考えられる。第 7 回紅児会展覧会の批評には、「年方年英の二社中が主となつて組織して居る鳥合会と併せて最も注目すべき有望な団体である<sup>22</sup>」と掲載されている。この第 7 回の参加者は、安田鞞彦、今村紫紅、磯田長秋らであった。清方は紅児会の中でも安田鞞彦には特に心惹かれていて、その関わりは生涯にわたることになり、紅児会からの制作への影響も考えられる<sup>23</sup>。



図 2

**模写** 清方は、修業において数々の模写を行った。その多くは師や芳年の挿絵であつて日本画や浮世絵を模写したものはあまり残っていない。新聞に挿絵を描いて読者から不評を買い、当時人気があつた武内桂舟や富岡永洗の挿絵や口絵を描き写して筆遣いや作風の習得に励んでいたこともあつた。だがここに寄贈された模写は、明治 39 年の喜多川歌麿の《當世踊子揃》<sup>24</sup>と、大正 15 年頃に模写した勝川春章の《婦女風俗十二ヶ月》のうちのそれぞれ一部である。

39 年は文展開設の 1 年前で、小規模の美術団体が乱立している中、各団体が大同団結できるか模索が続いていた。昭和 39 年 4 月の清方の鳥合会出品作《断崖》は、手を交わして酔う男女が恍惚と歩く先に断崖があり、無限の詩趣が宿っているとと言われて、この 13 回鳥合会の出品作の中では「第一位<sup>25</sup>」とされた。また、10 月に行われた第 14 回鳥合会展には、当館に下絵が残る《日高川》など<sup>26</sup>を描いている。《日高川》は確かに道成寺に取材しているが、清方の描いたものは女性が日高川を蛇身になって渡る姿であり、歌麿の大首絵とは異なる。《當世踊子揃》はどれも人物の顔中心の絵で、模写は淡い色が施されているが、完成していない。

《墨田河舟遊》(大正 3 年)は浮世絵から作風や構図を取り入れたものはあつたが、人物を借りて直接的に浮世絵を思わせるものは《霽れゆく村雨》(大正 4 年)までない。浮世絵は画格を一段低く見られ、師が画格の向上に苦心していた姿を見ながら修業していたことを考えると、自分の作品に直接的に浮世絵を思わせるような女性を登場させるのは、危険であり、また、新味に欠けるとも思われかねず、かなりの冒険であつたらう。

《霽れゆく村雨》は一大決心の作であり、浮世絵を低く見る世評への挑戦でもあり、その作品が最高賞を受賞したことは自信になり、画格向上への確かな一歩であつたと思われる。

大正 15 年頃の菱川春章《婦女風俗十二ヶ月図》の四月「杜鵑<sup>27</sup>」の模写は(図 3)、彩色が施され描写も綿密である。これは人物や着衣、蒲団などの文様までも線を手控えとして役立つほどきちんと写している一方、画題となっている杜鵑が描かれるべき空間は紙本の枠に収まらず、初めから模写の対象になっていない。また、調度品も、枕元の和綴じ本『榮華物語』や茶碗はきっちりと写してあるが、屏風や琵琶、花卉に至ってはまるで興味の対象ではなかったように、殆んど塗り残されている。

清方はこの作品の所有者から十二幅あるうちの欠けている二幅を補ってほしいと頼まれたが辞退して、箱書きのみを施した。その時に長く預かっていて写真を撮りもしたが、最も気に入ったこの一幅を原寸大で写しかけた時に返却の催促があ

ったという。

清方は、春章のこの絵の顔立ちや調度、衣類は写実によって描かれたと指摘し、「肉筆の美人画としては、浮世絵の中じゃ、これだけのものはない」と話している。

昭和4年に刊行された『日本風俗畫大成』<sup>28</sup>に賛を書いている。

「春章の十二月月は現在傳はる春章のものゝ尤も優れた名品であるばかりか、風俗畫として代表的と云つてもよからう、閨中杜鵑を聴くと云つたゞけでこの繪の情趣がいかに表現されてあるかは解る、朱塗の行燈をかき立てる女、琵琶棚に盛りを誇る牡丹の花、腹匍ひになつて中空高く翔りゆく時鳥を聴く女の氣品に富んで然かも限りなく艶なる、この繪に對すれば百五十年の昔も尚ほ眼前にあるが如くではないか」

また、昭和9年、数ある美人画から12作品を選んで『婦人公論』に美人画解説を書くよう依頼を受けた時には、再びこの「杜鵑」を紹介している。そこには、床の間より下の女性の姿の部分をトリミングした図版が掲載されている。模写では床の間に後回しにされたことも考え合わせると、清方が重点を置いて模写した部分にかなり近い構図である。また、後年の《虫の音》(昭和22年)には虫が描かれておらず、画題から女性が虫に耳を傾けていることが推察させるように描いたことも考慮すると、この杜鵑は清方にとって主題であるにもかかわらず描く必要性を感じ得なかったのかもしれない。

この時の解説は、以下のとおりである。

「春章は浮世繪師と呼ばれてゐる。だが、さういふ稱呼がこの派の作家たちの眞價、わけて春章の作にあつてどんなにかその作家と作品に迷惑を及ぼしてゐるであらうか(中略)日本畫の中で春章の女ほどゆたかな氣品を備へてゐるものは無い。彼のかく女には浮世繪の女の多くに見る白痴美ではなくてその時代としての教養が含まれてゐる。これは直ちに作者春章の反映と觀ることが許されるであらう。(中略)心もちながし目にうつとりとした女の顔、畫かれた美人の濱の眞砂とある中で、古今を通じてのよき顔として、いつでも眞つさきに思ひ浮ぶのはこの顔である<sup>29</sup>」

ここからも「浮世繪畑」にあるからこそきちんと評価されていないもどかしさが伝わるとともに、清方は春章の描いた作品の道具立てや、女性の顔立ちに惹かれていたことも分かる。



図3

**制作記録** 清方は、日記を欠かさずつけていたようで、その他にも作品の制作記録が遺されている(図4)。今回の寄贈品の制作記録は、『鏑木清方画集』にその読み下し文が掲載されている。それより以前は、隨筆「註文帳のぬきがき<sup>30</sup>」で抜粋を見ることができる。明治30年代後半、清方の日本画作品にはなかなか買い手が付かない頃で、仕事の殆んどは挿絵・口絵・表紙絵であった。今回の制作記録は日本画家として独り立ちした頃のものである。

作品によっては下絵を何回も描き直したり、紙張りしたりして修正を重ねたものもあれば、下絵や当たりも付けずに描かれたものもある。また彩色に入ってから描くのを止めてもう一度下絵から線を写し取って描き直しているものもある。さらに作品のサイズはまちまちであり、それに応じて制作時間も異なることを考慮しつつも、この記録からおおよその当時の制作ペースを知ることができる。

ここではその概略を知るために、便宜的に、軸・巻子と屏風、小品に分け、一双・双幅は2点、三幅対は3点として、ひと月における制作点数を数えてみると、表1のようになった。その中で、年間を通して記録がなされた大正7年から13年について見てみる。

まず大作の屏風は冬から春にかけて描いていて、夏には手がけていない。また作品数も8月は激減しており、9月10月も決して多くない。清方は夏の風情は好きであるが、制作を行うには汗が流れて、向いていないと感じていた。また、文展・

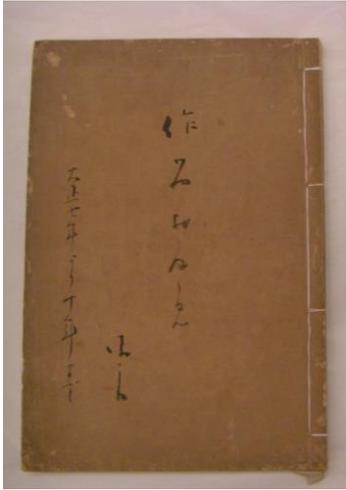


図 4

帝展に出品する作品を制作するため新たな画境を模索しつつ、主に英気を養うための充填期間と割り切って、静養に徹していたように受け取れる。官展の大作主義が批判され、清方も次第に屏風を描かなくなっていった。年間の作品点数は、大正 13 年が 80 点で最も多いが、約半年しか記録が残っていない大正 15 年は 95 作に及び、多忙な年で 200 点位は描いていたと思われる。7 年から 13 年の平均は 69 点。当初は挿絵を描いており、戦時中や晩年も依頼が減ったであろうから、単純には計算できないが、明治 40 年(1907)から昭和 24 年(1949)の官展を中心に活動していた頃だけの 43 年間に当てはめると、2,967 点以上、約 3,000 点になる<sup>31</sup>。

### 三 日本画の作品

**金沢絵日記** 清方は、幼い頃から『江戸名所図会』などに描かれた景勝地に関心があり、大正期の夏は武州金沢(現・横浜市)に滞在するのが好んだ。大正 7 年に逗留したのをきっかけにその風光明媚な土地に魅了され、9 年には現在の金沢文庫駅の近くの高台に別荘を求め、その四阿を「游心庵」と名づけている。

夏は家族や弟子たちを伴って近くの海岸に行き、水遊びをする様子を眺めて時を過ごす事もあった。清方は 8 年の金沢での逗留から絵日記をつけている。《夏の生活》(大正 8 年)、《君ヶ寄漫筆》(9 年)、《游心庵漫筆》(11 年)、《金沢絵日記》(12 年)、《金沢絵日記》(13 年)、《絵日記》(15 年)、《絵日記》(大正期)と 7 作あるうちの 13 年のものが今回寄贈された。

この日記には、自宅から金沢へ車で向かう様子や、泉鏡花とかつて訪れた神武寺への小旅行、そこから鷹取山への探索の様子が描かれている。

描き方は、木炭の当たりをつけることもせず、軽妙な筆遣いで楽しみながら描いたように感じられる。ただの記録ではなく作品としても楽しめるような色の配置や構図が用いられている。さらに、後半は絵物語のようで、神武寺の山頂で家族と別れ、男三人で切り立った山々の道なき道を、草を掻き分けながら進んだり、鷹取山の断崖に差し掛かってしまったりと波乱を含み、わくわくさせられる。

これは、清方が好んで描いた卓上芸術<sup>32</sup>の形態であるが、《にごりえ》(原作;樋口一葉)や《註文帖》(同;泉鏡花)、《金色夜叉絵巻》(同;尾崎紅葉)のように一流の著者の小説を元に描いたのではない。独自の物語を展開した文学性の強い作品であり、清方の創作の一つの試みを見出すことができる。



図 5

**桜もみぢ** 清方は、昭和 2 年に《築地明石町》を出品し帝国美術院賞を受賞した。これは浮世絵の美人を借りて描いた《霽れゆく村雨》とは異なり、明治の美人が見返っていて、浮世絵を連想させる作品で、美人画の最高峰と認められたものである。清方は美人画で名を売ったにもかかわらず、当館の所蔵品には昭和初期に描いた美人画の大作はなかった。清方の筆の力を伝えるためにはやはりその頃のコレクションが不可欠であると考えられていた。

そこへ平成 20 年、《桜もみぢ》(図6)が寄贈された。昭和 7 年に三越主催の七絃会に出品された力作である。七絃会は、清方の他、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、菊池契月、土田麥僊、平福百穂が会員で、当時の官展に深く影響を及ぼし

たとも言われていたメンバーで構成されている。麥僊と百穂は早くに亡くなり、速水御舟、西村五雲が後の会員になった。清方は、その選抜にも深く関わっていた<sup>33</sup>。

それだけの実力者が集っていた展覧会であったため、市井展というものの、各作家は力を抜くことはなかったようだ。清方が出品したのは、《瀧野川観楓》(昭和5年)、《目黒の栢苑》(8年)、《初冬の花》(10年)、《伽羅》(11年)、《お夏清十郎物語》(14年)、《たけくらべの美登利》(15年)、《菊花節》(17年)など、どれをとっても清方好みの明治の市井風俗を主題にして繊細な描写で制作された、味わいある作品である。

清方は、《桜もみぢ》について「姉さん冠りの手拭、浅黄合羽びらうどに黒天鷲絨の幅広な襟をかけたのは、江戸末期の、ちょっとした遠出姿、浅い山路の秋晴で、山駕籠にゐるのは妹であらう、町家の人々<sup>34</sup>」と自作自解している。また、「桜もみぢが風のない日にはらはらと舞い散る美しさ、それが畫因で、小高い丘の上、遊山旅の明治の女、それらは凡てその畫因を助ける運びになつてゐます。帝展などに妨げられて時が極めて乏しく、慌しい制作の氣もちでした。日数は判然してゐませんが、構想の期間は別として、下繪とも二十日あまりだつたと思ひます<sup>35</sup>」と語っており、清方の美人画は女性を描きたいから制作されるとは限らず、画因は明治の情趣にあり、その表現方法として得意とする美人を添えていることがわかる。

当時の記事には「清方氏《桜もみぢ》は二曲べう風の力作、氏得意の明治風俗である。山かごに乗つてえり足を見せてゐる娘を右双に、足を投げだして一服しようとする年増を左双に配し、空には紅葉した落葉が吹く秋風に舞つてゐるといふ情景、優江んなる情緒が畫面全體に漲つてゐる。娘の矢がすりの紫、年増の道行きの鶯色のもつとも美しい明治の色がうかがはれるのも興味多いが、烟草いれの紫革のさ江た色にまで氏のせん細な好みが見られる<sup>36</sup>」と絶賛されている。

清方は、官展や七絃会などを中心に出品し、近代肖像画の最高峰とも言われた《三遊亭圓朝像》(重要文化財)や、《一葉》などの肖像画、さらに《にごりえ》《注文帖》《目黒の栢苑》といった卓上芸術などにも力を注いでいた。



図6

《朝夕安居》詞書 清方の実力は不動のものになったが、次第に時局は戦争へ向かい、厭戦画と見なされる美人画は好まれなくなった。吉田五十八が設計を手掛けた新宿矢来町の画室を空襲で焼き、終戦を疎開先の御殿場で迎えた。21年に鎌倉の材木座に住まい、戦禍の跡に開催された日展では審査員としてだけでなく、平和を記念して美人画《春雪》を出品し、23年には《朝夕安居》を描いた。この作品は清方少年時代の戦争のない太平な世の中の様子を主題にしている。「美人画家」と言われると窮屈に感じていたが、戦いに反発して美人画を描きたくなつたと言ひ、「美人画」は太平な時代の象徴でもあり、そういった意味では決して「美人画家」と呼ばれるのを厭うてはいなかったのかもしれない。

寄贈された朝夕安居の詞書は、(資料4、図7)のとおりである。清方が愛した明治中頃の東京から100年以上が経った今、当時を知る人は少なくなった。清方が後世に伝えるために残そうとしたその頃の風情には、絵だけでは何を表しているか、どのように使っていたものなのかがすぐにはわからないものも出てきている。画家は自分の描いたものについてあまり語らないようであるが、一時の流行に共感を得て評価されることだけを望んでいるのでなければ、自作を自解することが後世の人の理解につながる。

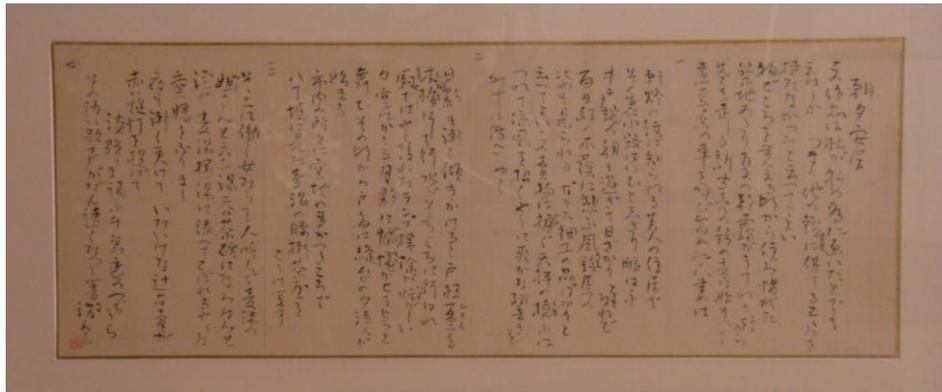


図 7

#### 四 文化勲章の受章

清方が文化勲章受章の有力候補との記事が見られるようになったのは、昭和 26 年頃からであったが、受賞は 29 年に持ち越される。日本画家では、竹内栖鳳、横山大観(昭和 12 年)、川合玉堂(15 年)、安田靉彦・上村松園(23 年)、小林古径(25 年)に次ぐものであった。当時の受章記事を見ると、「浮世絵系の町絵師として出発しながら、風俗画を純粋な絵画芸術にまで高め、それを世人に認めさせたことである<sup>37)</sup>と評論されている。師・水野年方は、日本画家として認められて展覧会審査委員に選ばれたが、志半ばにして明治 41 年に 42 歳で没している。清方は師から浮世絵の画法を受け継ぎはしなかったが、浮世絵の画格を向上させるという志を継いだ。浮世絵に惹かれて模写を行ったり、その雰囲気を取入れたり、さらには、浮世絵のみならず古画にまで遡って独自に研究を重ね、美人の絵姿を追求していた。浮世絵のみならず、風俗画という美術品の画格を後世に残すべき芸術として評価させたのである。

#### おわりに

「鏑木清方」は「かぶらぎ」「せいほう」でなく、「かぶらき きよかた」と読む。「きよかた」と発音されることも間々ある。また、清方は「浮世絵師である」とか「江戸っ子」であるなどと言われていることがある。これは「浮世絵系ではあるが、挿絵画家から出発した日本画家である」また、「東京っ子」である。

前述した様々な寄贈品により、コレクションは充実し、また、清方芸術の軌跡をより確かな形で伝えていくことができる。ご寄贈いただいた方々に心より御礼申し上げるとともに、さらなるコレクションの充実を図り、調査研究に努めて、市民の誇りとなる美術館として、収蔵文化財をより価値のあるものとして後世に伝えたい。

(鏑木清方記念美術館 主任学芸員)

### 資料1 清方の賞状

- ・「第十号 證 東京府平民 鑄木健一 五年十一月 小學初等科四級卒業候事 明治十七年十月廿二日 東京府京橋區私立 鈴木小學校」
- ・「第一号 證 東京府平民 鑄木健一 満八年 小學初等科二級卒業候事 明治十八年十一月七日 東京府京橋區私立 鈴木小學校」
- ・「賞状 優等 中等六級 鑄木健一 試験之成績ニ依リ 甲状ヲ章スル事 明治十九年十一月十二日 私立鈴木小學校」
- ・「証 東京府平民 鑄木健一 今般定期試業之成績ニ依リ尋常科第四年級ニ編入候事 明治十九年十一月十三日 鈴木小學」
- ・「第 號 證 東京府平民 鑄木健一 尋常小學校第四年修業候事 明治二十年七月二十日 京橋區私立 鈴木學校」
- ・「第 號 證 東京府平民 鑄木健一 高等小學校第一年修業候事 明治二十年十二月二十五日 京橋區私立 鈴木學校」
- ・「第五號 平民 鑄木健一 高等小學校第二年ノ終業ヲ証ス 明治廿一年七月十五日 京橋區私立 鈴木小學校」
- ・「操行証明状 鑄木健一 平素操行表ノ定ムル所ニ從ヒ品行中等タルヲ証明ス 明治廿一年七月十七日 鈴木小學校」

### 資料2 展覧会招待券 一覧

(裏面は白紙で書き込みもなし( )内は年号と券面のサイズ(縦×横) 単位 cm。《 》内は主な清方の出品作。)

#### 【烏合会】

- ・「烏合會 觀覽券 第十四回繪畫展覧會 十月十九 二十 二十一 二十二 四日間 御同伴 御随意 日本橋萬町 常盤木俱樂部」(明治 39 年 7.3×5.7)《深林の春光》
- ・「烏合會觀覽券 十五回繪畫展覧會 五月四日 五日 六日 七日 御同伴随意 日本橋萬町 常盤木俱樂部」(明治 40 年 7.2×5.3)《日高川》
- ・「觀覽券 烏合會 第十九回繪畫展覧會 五月廿七 廿八 廿九 三十 四日間 御同伴 御随意 日本橋 萬町 常盤木俱樂部」(明治 42 年 7.1×4.8)《抱一上人》
- ・「烏合會觀覽券 第廿回繪畫展覧會 五月二十 廿一 廿二 三日間 御同伴 御随意 日本橋萬町 常盤木クラブ」(明治 43 年 7.8×5.6)《高尾》
- ・「烏合會 第廿一回繪畫展覧會 觀覽券 日本橋萬町 常盤木くらぶ 十月廿七 廿八 廿九 三十 四日間 御同伴 御随意」(明治 43 年 7.7×5.8)《京の春 東の秋》

#### 【紅児会】

- ・「五月四日五日六日 第七回 繪畫展覧會 招待券 紅兒會 於日本橋常盤木俱樂部」(明治 39 年 7.6×7.6)
- ・「第八回 紅兒會繪畫展覧會 八月十三、十四、十五日 日本橋常盤(ママ)木俱樂部」(明治 40 年 4.1×12.1)

### 資料3 模写

- ・喜多川歌麿「當世踊子揃」の内「道成寺」複写、明治 39 年(1906)、紙本着色、台紙、38.2×26.7 cm
- ・喜多川歌麿「當世踊子揃」の内「鶯娘」複写、明治 39 年(1906)、紙本着色、台紙、37.8×26.8 cm
- ・喜多川歌麿「當世踊子揃」の内「三番叟」複写、明治 39 年(1906)、紙本着色、台紙、37.8×26.8 cm
- ・勝川春章「婦女風俗十二ヶ月」の内「杜鵑」複写、大正末から昭和初期、紙本着色、軸、76.8×26.8 cm

### 資料4 朝夕安居 詞書

「朝夕安居／この作品は私が私の爲に画いたとでも／云はうか つまり他の鑑賞に供するころを／持たなかつたと云つてよい／物ごころを覚える頃から住み慣れた／築地あたり夏の朝靄がうすれる頃から／巷を走しる新聞売の鈴の音に始まつて／煮豆屋の車を呼び留めた人妻は／軒燈の紋に知られる芸人の住居で／その裏小路にはひと志きり賑はふ／井戸端の朝も過ぎて日ざかりともなれば／百日紅の木蔭に憩ふ風鈴屋の／姿も見られる ガラス細工の品ばかりと／云つてよいこの賣物は擔ぐ天秤の撓ふに／つれて涼風を招くやうに爽かな響きを／町中に傳へてゆく／日影も漸く傾きかけると戸板一重を／木楯にして行水がそちこちに行はれ／厨 ではやゝ後れたランプ掃除が忙がしい／夕空にかゝる月影に蝙蝠がヒラヒラと／舞ひその頃から戸毎に縁台の夕涼みが／始まる／市内の所々に空地の多かつたころで／八丁堀に見た麦湯の腰掛茶屋を／こゝに写す／そこに働く女たちを人呼んで麦湯の／姐さんと云ひ湯呑茶碗になみなみと／注ぐ麦湯桜湯に添へてこぼれるやうな／愛嬌をふりまく／夜も漸く更けて いたいけな辻占賣が／赤い提灯を提げて／淡路しま通ふ千鳥恋のつぢうら／その幼い歌声がだん遠くなつて闇に消える／印」

表1

大正7年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子		4	3	6	6	8(2)	8	0	3		14(8)		52(10)
屏風	2(六)		1 (二半)	1 (二半)							2 (二曲一双)		6
大正8年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	3	9(1)	2(3)	10	9	8	6	(2)	4	2	12	13	78(6)
屏風	2(二)				2(二)						2(二)		6
大正9年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	13	9(1)	3	5	2	5	6	(1)	4	1	8	12	68(2)
屏風			2(六)			1 (二半)	1 (二半)			1 (六半)			5
大正10年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	6	5	3	2	9		7	8	6	0	7	8	63
屏風		2(二)											2
大正11年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	2	7	2	7	4	14	3	0	8			4	51
屏風	1 (二半)		1 (二半)										2
大正12年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	4		6	3	2	6	2	0	0	3	8(5)	8(4)	42(9)
屏風													
大正13年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	9	7	1	4(1)	12	10	7	6	5	2	9	8(1)	80(2)
屏風													
大正14年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	2	4	4	5	16	13	—	—	—	—	—	—	44
屏風													
大正15年 昭和元年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	1	12(6)	25(5)	16(1)	22(5)	19(1)	2(1)	—	—	—	—	—	97(19)
屏風													
昭和2年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	—	—	11(1)	14	—	—	—	—	—	—	—	—	25(1)
屏風													
昭和3年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	6	8	19(2)	11(2)	15(3)	4	—	—	—	—	—	—	63(7)
屏風													
昭和4年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6
屏風													
昭和5年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
資料なし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
昭和6年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
軸・卷子	1	3	5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	11
屏風				2(二)									2

※サイズはここでは勘案していない。形状が書いていない物は軸・卷子に含み、小奉書・扇面・絵日記・色紙・地紙・口絵等は「軸・卷子」欄に( )書とした。また、屏風は「六」は六曲一双を「二」は二曲一双を、半双の場合は「半」を付した。半双を1点とし計の欄でカウントした。表からも分かるとおりに記載のない年や月もあり、後から前の時期に描いたものを追加しているところもあることから、ここに記載されているものが総てとは考えにくい。あくまでも清方の制作の様子を大まかに把握するのを目的とする。

- <sup>1</sup> 八柳サエ、横浜美術館叢書6『鏑木清方と金沢八景』、平成12年12月、有隣堂。173-191頁に図版と読み下し掲載。
- <sup>2</sup> 山田肇監修『鏑木清方画集』、平成10年8月、ビジョン企画出版社
- <sup>3</sup> 鏑木清方「鈴木の学校」「神田の学校」『こしかたの記』昭和36年5月、中央公論美術出版
- <sup>4</sup> 「湯島の住居」『こしかたの記』同前、148頁
- <sup>5</sup> 「湯島の住居」『こしかたの記』同前、149頁
- <sup>6</sup> 大石雅方は、「同門」と「湯島の住居」『こしかたの記』にあり、山本宣方は清方の文には見当たらないが、湯島天神にある水野年方を顕彰する碑の裏面にその名を見つけることができる。
- <sup>7</sup> 本間春方。向島百花園「月岡芳年翁之碑」
- <sup>8</sup> 池田輝方の本名は池田正四郎
- <sup>9</sup> 小山光方、清方の兄弟子。「大根河岸の三周」『こしかたの記』。顕彰碑では筆頭。
- <sup>10</sup> 笹井英昭、右田年英の門人。向島百花園「月岡芳年翁之碑」
- <sup>11</sup> 寺田英光、右田年英の門人。向島百花園「月岡芳年翁之碑」
- <sup>12</sup> 大石雅方、「水野年方顕彰碑」。「湯島の住居」『こしかたの記』
- <sup>13</sup> 村岡應東か。村岡應東は松本楓湖に学び、29年に大野静方等と巽画会前身の緑巽会を結成、後鳥合会に参加。
- <sup>14</sup> この他、清方が参加した肉筆回覧誌は、「たけくらべ」を描いた『研究画林 卷之四』(29年)と『研究画林 卷之六』(29年)、「雨後」が描かれている『研究画林』(30年)がある。
- <sup>15</sup> 清方の作品については、「重盛夢見父首級 是又掬すべき図全体白ミたるを惜しむ」「樽人形 簡略ニ過さしと云□□」<sup>せいか</sup>とある。
- <sup>16</sup> 竹田敬方との合作
- <sup>17</sup> この他《秋之夜図》が描かれている『紫紅 卷之壺』(30年)がある。
- <sup>18</sup> 鳥合会に参加。34年の連合絵画共進会等に出品。
- <sup>19</sup> 年方門で清方の兄弟子。
- <sup>20</sup> 速水御舟「楓湖先生と今村紫紅さん」『塔影』第10巻第3号、昭和9年3月14-16頁
- <sup>21</sup> 『鳥合会と『新小説』の時代』(鏑木清方記念美術館叢書8)、平成18年、鎌倉市鏑木清方記念美術館
- <sup>22</sup> 『都新聞』明治39年5月8日。『日本美術院百年史』3巻上630頁所収。
- <sup>23</sup> 「傘谷から京橋へ」『こしかたの記』
- <sup>24</sup> 《當世踊子揃》に関しては、『婦人公論』において、以下のように讃を書いている。「歌麿が描く女性の繪が、その聲價を減殺することだけではあり得ない。惱ましきまでに柔婉なその肢體、丸髻の重さを、よくもあの嫋々たる細身に堪え得られたものと思はせるやうな、細腰の作家としては前に鈴木春信ありとは云へ、それは殆んど人間としての生活を超えてゐる(中略)「當世踊子揃」と題する一枚繪の大圖は、多分寛政期の圓熟した時代の作と思はれる、いくつ位あるのか知らぬが、こゝに掲げた「鷺娘」の他に「吉原雀」「道成寺」などがある「鷺娘」は長唄もので、始めの出は、白衣に黒の帶、白い帽子を冠つて、蛇の目の傘を持つた形、<sup>せいか</sup>後に引き抜いてからは、ちよつと道成寺に似たやうなこしらへになる、これはその後段の方を寫したものである。うしろは雲母摺で、花笠はうすみどり、その綠色から、眉が透いて見えるところ、又なくたほやかな風情がうかゞへる」第19巻第2号336頁(昭和9年2月)
- <sup>25</sup> 『萬朝報』明治39年4月15日
- <sup>26</sup> 図版はないが《棧橋》《道成寺》《眞間の入江》が出品されている。《道成寺》もあるが、清方は大首絵を作品では用いていない。
- <sup>27</sup> 《婦女風俗十二月月》の四月を「ほととぎす」と紹介しているが、ここでは「杜鵑」で統一する。
- <sup>28</sup> 『日本風俗畫大成 第六 徳川時代中期』明治4年8月20日、中央美術社
- <sup>29</sup> 『婦人公論』第19巻第4号、昭和9年4月、中央公論社
- <sup>30</sup> 昭和9年、『鏑木清方文集 二 明治追懷』所収
- <sup>31</sup> 清方作品として市場に出回っているものに挿絵の原画も少なくない。中には墨だけで描いたものもあり、木版の挿絵より後の挿絵は原画が残り、作品として売られているのを見かける。これらを含めるとさらに数は増える。例えば、写真版挿絵を掲載していた『東京日日新聞』には、明治45年から昭和12年までに759コマ描いており、雑誌『婦人世界』では、大正3年から6年にかけてカラー9作、モノクロ52コマ描いている。
- <sup>32</sup> 人の肩越しに見る大展覽会に出品された大作とは異なり、人混ぜもせず手に取って俯してその筆遣いまでも味わう、卷子や画帳などの小品で、挿絵や口絵などの印刷物も含む。
- <sup>33</sup> 『鏑木清方と七絃会』(鏑木清方記念美術館叢書11)、平成21年12月、鎌倉市鏑木清方記念美術館
- <sup>34</sup> 『清方画集』昭和32年11月20日、美術出版社
- <sup>35</sup> 『塔影』第8巻第11号、昭和7年12月
- <sup>36</sup> M「七絃會展」『東京朝日新聞』昭和7年11月24日9面
- <sup>37</sup> 『萌春』第2巻第11号、昭和29年12月12頁